

大学礼拝

CHAPEL NEWS, No.131

2014年12月15日

クリスマス特集号



宗教部長 佐々木 哲夫

あの方は榮え、
わたしは衰えねばならない。

「確かに認識」

「天から与えられなければ、人は何も受けることができない。」
花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人はそばに立つて耳を傾け、花婿の声が聞こえると大いに喜ぶ。だから、わたしは喜びで満たされてい

は、驚くべき言葉を告げたのです。

まさに嫉妬に駆られてし

まう緊迫した状況でした。しかし、洗礼者ヨハネ

は、「驚くべき言葉を告げた。しかし、洗礼者ヨハネ

が、洗礼を授けています。みんながあの人の方へ行っています」と告げました。

ヨハネの弟子は、「あの人

が、洗礼を授けています。みんながあの人の方へ行つ

てます」と告げました。

ダニ川で洗礼を授ける活動を始めました。

自分と同じ分野の仕事を始めた年下の親戚が、自分が何者であり、どのように生きるべきかを明確に認識できたのです。換言するならば、イエス・キリストの誕生は、確かに自己認識の基準となつたのです。預言者たちが待望し、博士や羊飼いたちが訪れ、洗礼者ヨハネが証したイエス・キリストの誕生は、新しい価値観の到来でした。

二〇一四年のクリスマスを迎えてます。新しい価値観を与えたイエス・キリストの誕生をお祝いしたいと思

る。あの方は榮え、わたしは衰えねばならない。
(ヨハネ福音書三二七~三〇)



洗礼者ヨハネは、イエス・キリストの到来によって、自分が何者であり、どのように生きるべきかを明確に認識できたのです。換言するならば、イエス・キリストの誕生は、確かに自己認識の基準となつたのです。預言者たちが待望し、博士や羊飼いたちが訪れ、洗礼者ヨハネが証したイエス・キリストの誕生は、新しい価値観の到来でした。

二〇一四年のクリスマスを迎えてます。新しい価値観を与えたイエス・キリストの誕生をお祝いしたいと思



クリスマス - 暗闇の中で輝く光 -



院長
星宮 望

クリスマスの季節がまいました。クリスマスとは、われわれ人類の救い主としてのイエス・キリストの生誕をお祝いするものであることはよく知られています。キリスト教国でない日本において、どういうわけかクリスマスを楽しみにしているひと、祝うひとが多いのですが、その意味・意義を理解している方が少ないように思います。東北学院大学に学ぶ学生諸君は、毎日の大学礼拝を通じてその意味・意義を理解していることと思います。ここでは、改めてクリスマスが神の御

子・救い主がお生まれになつた、すなわち全ての人を照らすまことの光が世にきたことの意味を考えてみましょう。

二〇十一年三月十一日の東日本大震災の当日の夜を覚えている方々も多いと思します。大地震の時に、東北学院大学では全学の教授が土壙キャンパスに集まって年度最後の全学教授会を開催していました。当時、学長であった私は即座に会議を中断し、緊急避難・連絡体制に入りました。多くの教職員とともに夜遅くまで種々の対応を徒歩で自宅まで帰りました。帰宅できない多くの方々に毛布や食料品を配布するために自宅に帰れる人は徒歩でも帰ることにしたからです。この晩には、電力供給が停止していましたので、大きな国道も、普通に利用している県道も明かりが全くない、暗

闇の世界でした。その中を時々自動車が通るので、危険防止のために手持ちの白いタオルを手で大きく振り回して歩行していることを運転者に示して道路を渡りました。この闇夜の中を歩いていたときに、気がついてみると空には満天の星がきらきらと輝いていてそれは見事なものでした。

改めて、真っ暗闇になってみると、光を見ること、意識することが出来ることに気がつきました。この小さな経験以上に、東日本大震災の衝撃の中で多くの人々が苦難・困難の暗闇の中に、これまで思つてもいなかつた小さな光がありがたさ、素晴らしい光がたつたのではないかと思うことがあります。

改めて、救い主イエス・キリストの誕生は、すべての人を照らすまことの光が世に来たこととして聖書が告げている(ヨハネ1..9)ことを感謝して受け止めたいと思います。

して、多くの困難な生活の中にあって、確かな希望をどこに見出したらよいかを求め続けている方々も多いと思います。人間の作り出すものは必ずしも確かな希望に結びつくとは限りません。東



クリスマス —民全体に与えられる大きな喜び—



理事長・学長
松本 宣郎

古代のキリスト教徒たちは周囲の多神教徒たちの冷たい目にさらされていました。二世紀ごろのケルソスという人がキリスト教を攻撃する書物を著しています(オリゲネス『ケルソス駁論』)というキリスト教教父の著作に収録されています。大部分は本学出村みや子教授らの手による邦訳で読むことができます)。それによると、「キリスト教徒という連中は、いつも自分は罪深い人間だと憂鬱で悲しげな顔をして、そこそそ集まっている奇妙な群れだ」と揶揄されています。

公に礼拝することもほぼかられる初期教徒たちは、確かにそのような様子で生きていたのかも知れません。それに、現代日本のキリスト教徒も、少数派という点では古代と同じで、似たような印象を周りに与えていないとも限らないよう思えます。

ところが、新約聖書が示すのは、全く逆の生き方のように思われるのです。百匹の羊の一匹が行方不明になつたら必死に探し

出して、その羊飼いは、友達や近所の人々まで集めて、大変に喜びます。放蕩息子がぼろぼろになって帰ってきたとき、父親は宴会をして喜びを表すのです(いすれもルカ一五)。パウロがギリシアのフィリピの教会に宛てた手紙もこう言っています。

「信仰に基づいてあなたがたがいにえを献げ、礼拝を行ふ際にたとえわたしの血が注がれるとしてもわたしは喜びます。あなたがた一同と共に喜びます。

同様にあなたがたも喜びなさい。わたしと一緒に喜びなさい」(フィリピ二一七、一八)と。「フィリピの信徒への手紙」は、「喜びの手紙」と呼ばれるほど、このような表現があふれています。

聖書のメッセージの基調は、このように喜びであります。ケルソスの時代のキリスト教徒たちも、実はもっと喜びを露わにすることも多かったのではないか、と思うのです。そして現在の日本の教会も、キリスト教学校も、もっと喜びを打ち出してよいと思えるのです。

わたしたちは、日常喜ぶことを経験しますし、喜んでいたいと思うものです。ひいきのサッカーチームが勝つとうれしいですし、おいしいケーキや寿司を食べると喜ぶのです。もっとも、喜びには度合いの違いがあります。福袋を開けても、大喜びできるときと、迷い出たあげく死んでしまうところ

とき、食事を楽しめるほどに自分が健康であると感じるでしょう。こちらの方が喜びは深いと言えるのではないでしょうか。あるいは、わたしたちが、他者を助けるということを考えたとき、助けられる側の喜びだけではなく、助けて、場合によっては自分に若干の損失や痛みを伴つても、助けてあげられたのを喜ぶ気持ちを対比することが出来るかもしれません。どちらが大きいか、深いか、一概には言えませんが、喜びの質の違いを感じられます。

そのように考えるとき、聖書が勧める「喜び」の、独特的のニュアンスに気づくのです。先に引用したパウロの言葉の背景には、外から迫害を受けている状況があります。だから彼は「自分が殺されて血を流しても、それが信仰を守りキリストを信じての殉教なら、わたしは喜ぶし、あなたがたも喜んでくれ」と語っているのです。ここで語られる「喜び」は、何かがおいしいとか試合に勝ったとかいう喜びを超えた、常識的ではない喜びと言わざるを得ないでしょう。あえて言えば、パウロの喜びは、自分がキリストにつながっているという信仰を堅く守り、命を失つてもそれを守り、それが正しいことを確証できる喜び、といふことでしょう。聖書の勧める喜びの深さがここに示されています。

九十九匹と一匹の羊のたとえにもどります。福袋を開けても、大喜びできるときと、迷い出たあげく死んでしまうところだつた一匹の羊も、助けられて喜んだ、と思

したちのことをたとえて語られているのだ、ということです。そのことを踏まえて「ルカ一五・七」が理解できます。「悔い改める人の罪人については、大きな喜びが天にある」というのです。小さなように見える一人の喜びを包摂する、途方もない喜びが、天に、つまり神とキリストにある、ということであります。「放蕩息子」もまたわたしたちの事を示しています。父の元に戻つて「喜ぶ」わたしたちを、父は、天は、神は、途方もなく喜ぶ、というわけです。

アドヴェントの季節に入っています。救い主キリストの到来が、ルカ福音書一章で美しく描かれます。天使が草原の羊飼いに「民全体に与えられる大きな喜び」を告げます。さらに「天の大軍が加わり、神を賛美して歌うのです。わたしたちは「楽しいクリスマス」であります。いくつかの「喜び」が用意されるでしょう。そのわたしたちの楽しさと喜びは、天における、神における、大きいなる喜び、楽しみがあるからこそなのだ、ということを聖書は教えている、というべきでしよう。

わたしたちが感じ、体験する喜びは、どうしても小さく、時間的に限界があることをわたしたちは知っています。しかし、キリストにつながる限り、わたしたちの喜びは天の大きいなる喜びにつながり、時間を超えて、まだ続くのだ、と信じたいと思います。

あたた

温かく美しい

うつく

光のなかへ

村上みか



「高い所からあけぼのの光が我らを訪れ、暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、我らの歩みを平和の道に導く。」

(ルカによる福音書 二章七八、七九節)

今年も十一月に入るとクリスマスの準備があちこちで始められ、寒い冬の日々に温かなひとときを待ち望む人々の思いが感じられます。クリスマスを祝う人たちは、おそらくおいしい料理やプレゼント、また友人や家族との交流に温かさを求め、それを楽しみにしているのでしょうか。それはそれで素敵なことですが、それが一時的な温かさに終わらず、持続するものとなるためには、クリスマスの本当の意味を

知つておく必要がありそうです。

クリスマスは、ご存じのように、イエス・キリストの誕生を祝うときです。しかし聖書の

イエス誕生についての記述を見ると、必ずしも喜ばしく温かい言葉に満ちているわけではありません。「主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、…身分の低い者を高く上げ」とか、「光が我らを訪れ、暗闇と死の陰に座している者たちを照らし…」といった表現でイ

エス誕生の意味が語られています。クリスマスというのはつまり、明るく元気に生きている人間が楽しく温かいときを作り出すというものではなく、逆に「暗闇や死」の中にある人間、苦しんでいる人間に温かい光が与えられるときであると言われているのです。

イエスは「神を愛し、隣人を愛する」ことを教えましたが、私たちの生きている世界は、残念ながら愛の成就された世界ではありません。むしろ、それとは逆に、人が互いに傷つけあい、信頼関係を築くことの難しい世界だといえるでしょう。人間の心の闇に覆われたこの世界で、しかしその闇をよく見つめ、そして何よりも自らの闇をよく見つめ、それを苦しみ、悲しく思つ——そのように謙虚に人間の現実に向き合い、

それを受け止めることのできる人が、心の底から光を求め、そのような人にこそ光が訪れるのです。

イエスの宣教の最初の言葉は「悔い改めよ」であつたと聖書は記しています。自分の闇から目を背けることなく、それを痛み、そこから脱したいと願う、そうして人が人間の現実を超えたところへ目を向け、真実を求めるとき、その人は闇を脱し、光の中を歩き始めるのです。

なぜなら、深く悔い、神を仰ぐことによつて、人は自らの思いから解放され、本当の意味で人を愛すことができるようになるからです。この愛の光はやがて周囲にも伝わり、その中で人と人の間に信頼に満ちた関係が築かれ、平和の道が開かれてゆくのです。

クリスマスはしたがつて、改めて自分を見つめ、闇に光が訪れることを祈り、イエスによってその可能性が開かれたことを感謝するときといえます。今年のクリスマスが、光の温かさと美しさを感じられる良きときとなることを願つています。

各キャンパスのメッセージ

Izumi

泉キャンパス
大学宗教主任

野村 信



クリスマスおめでとうございます。今年も、主イエス・キリストの誕生をお祝いするクリスマスの時期を迎え、皆さんと共に祝うことができると思います。大学に来て初めてクリスマス礼拝に出席する人も、何度も出席する人も、この時期、心から喜び、満足できる時となりますようにお祈りしています。

クリスマスはなんと言つても、「光」がとても気になる時です。季節としては夜が長くなる中で、冬至を境に今度は昼が長くなり始めますが、この季節に、キリストの誕生を「光」として祝うことは、格別に意味があると思います。聖書には、キリストが誕生するはるか以前にイザヤの預言を記しています（九章一節）。

闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。太陽の光を超えて、いや太陽の光も含んで、神からの「大いなる光」が世界に輝きました。この喜びをぜひ知つて、クリスマスのまことの喜びを共に分かち合いましょう。

Tagajo

多賀城キャンパス
大学宗教主任

原田 浩司



去年のクリスマス・イヴのことです。ミヤギテレビの情報番組「OH!バンデス」で、多賀城キャンパスのイルミネーションと礼拝堂のパイオルガンの取材があり、その模様が生中継されました。多賀城から、クリスマスの意味とパイオルガンの音色を多くの人々に届ける、とても良い機会となりました。

今年もクリスマスの季節を迎えました。世間では早くも十一月上旬からクリスマスの飾り付けを始めたお店が日に付くようになります。競争競技種目で使われる「フライング」の御子イエス・キリストの誕生を祝うクリスマス前の四番目の日曜から始まる準備の期間です。聖書のクリスマスの記事を見ると、イエスキリストの降誕の意味が様々な角度から語られています。ヨハネによる福音書の冒頭には、「言のうちに命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている」とあります。学生の皆さん、ぜひこの季節に聖書を手に取り、暗闇を照らす光としてのイエスキリストの到来の意味について考えてみて下さい。

Tsuchitoin

土樋キャンパス
大学宗教主任

出村 みや子



教会の暦、教会暦では十一月三十日の日曜聖日から待降節に入りました。キリスト教ではない日本でもクリスマスは冬のイベントとして定着し、街を彩る光のイルミネーションは寒い冬の季節を過ごす私たちの心を温かくしてくれます。英語のアドヴェントは、「到来」を意味するラテン語Adventusに由来し、神の御子イエス・キリストの誕生を祝うクリスマスの準備期間が年々早まっているように感じます。

キリスト教では「アドヴェント（待降節）」と呼ばれる、クリスマスを迎えるための特別な準備期間があります。今年は十一月三十日からはじまります。「待」の文字があるように、じっくりとクリスマスの意味を噛みしめながら、焦らず慌てずに、この季節を過ごしていくましょう。

クリスマス(キリストの誕生)とは、イエス・キリストの誕生を祝うためのミサ(典礼もしくは礼拝)のことです。だから、イエス・キリストの誕生が、クリスマスとして特別に祝われるのでしょうか。

第一に挙げられる理由は、神が人となられたといつ出来事だったからです。即ち、被造物の世界において、換言するならば、人間の五感で認知し思考できる世界において、神が人間と出会われた出来事だからです。

第二に挙げられる理由は、旧約聖書の預言者たちが待望していた救い主(メシア)の誕生だったということです。それは、贖いの業(十字架の出来事)によって人間の罪を赦すという救いを実現する神の子の到来でした。ペテロの手紙は、そのことを「(イエス・キリストは)十字架にかかるて、自らその身にわたしたちの罪を担つてくださいました。わたしたちが、罪に対する死んで、義によつて生きるようになるのです。そのお受けになつた傷によつて、あなたがたはいやされました」(ペテロ一章一四節)と証言しています。

六世紀の修道僧ティオニシウス・エクシゲウスは、聖書に記載されている年代とローマ皇帝の治世年数とを累積対照することによって、イエス・キリストの誕生の年数を割り出し、それを境に歴史を紀元前(B.C.= Before Christ)へ紀元後(A.D.= Anno Domini)に分けました。それほどいは、イエス・キリストの誕生は画期的な出来事だったのです。

皆さんは、クリスマスをどのように理解してらぬでしょうか。それは、クリスマスの日に何をするかで明らかにされています。プレゼントを交換する、みんなで楽しくパーティーをするなど様々でしょう。今年のクリスマスは、東北学院大学の礼拝堂やキリスト教会で行われるクリスマス礼拝に出席し、本当のクリスマスの意味を体験していただきたいと思います。

なぜ12月25日が クリスマスなのですか?

四世紀ローマ帝国の国教となつたキリスト教は、その後ローマ帝国が東西に分裂したのに伴い、ローマを中心とする西方教会とコンスタンチノープルを中心とする东方教会に分かれました。クリスマスの祝い方においても両者の間に違いが生じてきました。

西方教会(ローマ・カトリック・プロテستانト)の伝統では、三世紀の末頃からキリストの誕降日として守られて来ました。東方教会(ギリシャ正教系)では四世紀頃から一月六日公現日に降誕を祝つて来ましたが、西方教会との調整を経て、十二月二十五日には降誕を一月六日には異邦人への救い主到来を祝うようになりました。

なぜ十二月二十五日なのかについては、古代教会で考えられていた独特の歴史観にもとづく日にちの算定があるようです。また、冬至に近いことから異教の「太陽の誕生」祭に対抗して、「義の太陽」(=キリスト)の出現を祝つたものであるとも言われますが、確かにことはわかりません。ひとつ確実なことは四世紀から五世紀にかけてキリストの受肉と人格に関する論争があり、キリスト養子論の、異端説を退けるために、キリストは神の御子として誕生されたことが東西両教会で強調された事実です。つまり、クリスマスを十一月二十五日に祝うということは「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主が生まれになつた」(ルカ二・十一)という、神の御子が人間の形をとり(受肉)、私たちの近くにおいてになつたことを意味します。



△世界各地のクリスマス△

オランダのクリスマス

野村 信

個人的なことであるが、オランダと私は縁が深いらしい。祖父、杉田虎狐獅（こじろう）は、早稲田の商科第二期生の時に植村正久牧師（1857-1925）から受洗したが、植村は米国のオランダ改革派の宣教師たちが活躍していた横浜バンドの出身で、祖父もここと関わったらしい。私が若き日に留学した先は、オランダ人たちの移民で占められた米国のミシガン州のホランダ市であり、自分の信仰的なルーツを確認し、さらに彼らの働きに対し当時出席していた教会で謝辞を述べたことがある。その後、オランダ本国へは八回出かけた。一〇〇八年には、一年間アムステルダム自由大学で研究生活を送った。今も、オランダの人々とは何かと交流がある。彼らの生活や文化は良く知っているつもりであるが、今回は、時節がら米国のオランダ人のクリスマスとヨーロッパ本国のオランダ人のクリスマスの様子について記しておこう。

米国のクリスマスは静かで美しい。

都会では様々なクリスマスの過ごし方があるかもしれないが、総じて一般市民の居住空間、どちらかと言えば地方の生活では、庭や街路樹をクリスマスの電飾（イルミネーション）で飾り、庭先にはマリアとヨセフに見守られた幼子の降誕の模型が置かれる。待降節（アドベント）になると一斉に電気が灯り、雪の積もる夜の街にクリスマスの訪れを告げる。町全体の造りはゆったりとしているので、車でドライブしていくと、どの通りが華やかな飾りをつけているかが分かり、お気に入りのコースまで出てくる。なるほど、この時期に十二番街が一番綺麗だという噂があつたことを耳にしたことがある。

米国ホランダ市は、ミシガン湖の東海岸にあり、オランダ改革派と呼ばれるキリスト教徒たちが多く居住する地域である。車で数分走るたびに十字架や尖塔が見えるほどあちこちに教会が立ち並び、十一月二十四日のクリスマスイブにはどこの教会も讃美の歌声で満ちている。子供たちは、翌日開封できるサンタクロースからのプレゼント

トを楽しみにしつつ床につく。翌二二日のクリスマスにも礼拝があり、人々は教会へ集う。それも多くの会社や学校は、「四日から一月一日まで、クリスマス休暇に入り、一五日の礼拝に人々は支障なく出席できるからである。

こうして、すっかりクリスマスの楽しい季節となり、あちらこちらでパーティーや催し物が行われ、家族や友人たちと楽しく、親しい時間を過ごして新年を迎える。

オランダ本国でのクリスマスは、米国のクリスマスほど静かで、美しいといふ趣はなかつた。確かに、駅や、主要な通り、商店街は、美しいイルミネーションで飾られているが、ヨーロッパと

いう狭い地域にひしめく居住空間だからであろうか、「森閑として、透明な夜」を迎えるという気分にはなれない。ただし、公共の施設が工夫を凝らして、クリスマスの装飾で室内を飾り、音楽会、美術展、催し物を様々に行っていた。研修中の私としては、のんびりクリスマスを楽しんでいる暇はなく、もっぱらアムステルダム公共図書館に入り浸っていたのだが、館内中央に大きく輪の状態でひろがる栓（ひらぎ）の緑の枝に、直径十五センチほ

どの真紅の輝くボールがたくさん付いた飾りに、しばしば見とれ、室内の白さと緑と赤の良い色合いにクリスマスの喜びを感じたものである。

総じて、外国でのクリスマスは、日本とどのように違つたのかと振り返ると、あまりコマーシャリズムがないといふことが、クリスマスの意義を感じさせてくれたのかもしれない。街角でジングルベルが鳴り、クリスマス・ケーキが飛ぶように売れていくクリスマスとはかなり趣が違うようだ。それでも、やはり私は日本人。正月も楽しんで、といういしささか欲張りな楽しい時をこの時期過ごしている。



Activity in religion part

2014年度 宗教部の活動

通年

大学礼拝

礼拝（朝）土樋・泉・多賀城キヤンバス

月～土曜日

礼拝（夜）土樋キヤンバス

毎週水曜日

寄宿舎礼拝

泉女子寄宿舎

毎週月曜日

泉寄宿舎・旭ヶ岡寄宿舎

毎週火曜日

聖書研究会

土樋・泉・多賀城キヤンバス

毎月

宗教部会

土樋・泉・多賀城キヤンバス

毎月

四月

『大学礼拝・チャペルニュース』

二八号（新入生歓迎号）発行

『一〇一四キリスト教活動の

ハンドブック』発行

第十九回スプリングカレッジ

（十一日）

春季宗教教育強調週間

特別伝道礼拝

・泉キヤンバス

（十三日）

・土樋キヤンバス〔朝〕

（十四日）

説教者 藤掛 順一氏

（横浜指路教会牧師）

・多賀城キヤンバス

（十三日）

・土樋キヤンバス〔夜〕

（十三日）

説教者 川崎 公平氏

（西千葉教会伝道師）

・多賀城キヤンバス
（十九日）
・土樋キヤンバス
（十一日）
・泉キヤンバス
（十日）

『大学礼拝・チャペルニュース』

二九・一三〇合併号発行

七月 第十九回キリスト者教員研修会

（七日）

八月 第四十回サマーカレッジ

（四日～六日）

九月 第五十九回教職員修養会

（三日～四日）

十月 秋季宗教教育強調週間

（十六日）

特別伝道礼拝
・泉キヤンバス
・土樋キヤンバス〔朝〕

（八日）
・土樋キヤンバス〔夜〕

（八日）
説教者 本名 靖氏
（東洋大学教授）

・多賀城キヤンバス
（八日）
・土樋キヤンバス〔夜〕

（八日）
説教者 野村 正宣 氏
（東洋英和女学院中学部高等部教諭）

キリスト者等推薦学生との懇談会
（初旬予定）

『大学礼拝・チャペルニュース』

二三号（クリスマス特集号）発行

二〇一五年

一月 第十九回キリスト者教員研修会

（二十二日）

二月 礼拝オルガニスト懇談会

（十六日）

三月 大学礼拝説教集第一九号発行

研修会・修養会発題報告集発行

四月 大学礼拝説教集第一九号発行

研修会・修養会発題報告集発行

五月 第十九回キリスト者教員研修会

（二十六日）

編集後記

クリスマスの飾りや電飾を目にすると、今年もクリスマスを祝う季節がやってきたと感じる人は多いでしょう。この時季には、光が嬉しく、温かい団欒、楽しい語らいのはずむ時です。大人にクリスマスを喜びましょう。ただし、この喜びの最も深いところで、幼子イエスは馬小屋で誕生され、世界にまことの光、慰めをもたらしてくださいました。この幸いに目を開かされたいものです。

二〇一四年十二月 東北学院大学宗教部
二九八〇一八五二
仙台市青葉区土樋一丁目三番一號